



岐の暮らしは制約が大きい。わずか三日暮らして何が分かる、と言われたらそれまでだが、三十年の時を経て、改めて感じたのは、制約は大きくなりこそすれ、ちっとも減じていない、ということだ。ことに時間と移動のそれを本土の感覚で思い及ぼせることはかなり難しい。

ぼくは一日前に隠岐入りしたが、子ども落語の一行は公演日の朝のフェリーで現地入りした。朝九時美保関の七類港を発、隠岐の西郷港に着くのが昼前である。港からは、実行委で手配されたマイクロタクシーと実行委自ら運転手となつての送迎車が数台、これにレンタカーに乗るぼく自身も加わつて、分乗して会場へと向かう。路線バスに乗るとか、タクシーをつかまえる、などそのいずれもあるにはあるが、どう見ても無理筋である。

着くとすぐ、会場に隣接する会館で、実行委員手作りのサザエカレーとバイ（バイ貝）カレーを食す。大人も子どももおかわりする。

一時間半の寄席を終え、着替えを済ませた子どもたちのかつこうは、Tシャツに半ズボン、ではない。みなみな海水パンツにラッシュガード、気の早い子は浮き輪をふくらませている。実は、計画では「海遊び」としていたのだが、海水浴はできないのではない

か、と実行委とは相談していたのだった。磯を散策する、安全なところで足を浸ける、などを想定し、隠岐だからと言ってどこでも泳げるわけじゃない、と言うタイミングを探っていたのだが、そんな言辞を弄する一分の隙も与えず、子どもたちは完璧な海水浴モードになり、はやる心を抑えつけるのに懸命である。

未指定の海水浴場が宿泊先の近くにあるにはある。ただ、だれもその様子を知らない。とりあえず向かつてみるが、危険と思われる場合は決して無理はしないように、子どもたちには聞こえぬように保護者に伝え、賭けのようにして赴くしかなかった。

結果、賭けには完全勝利した。子どもたちが遊び回るに十分な広さ浅さで砂浜が広がり、人が来ないぶんだけ澄み切った、ゴミなど皆無の美しい渚が、西にぐんと傾いた陽光を柔らかく散らして一行を包み込んだのだった。ハマグリを拾った、魚を逃がした、ヤドカリをつかまえた、と見るもの触るものすべてにはしゃぎまわる子どもたち、大人たち。

その後、ログハウスに戻つてバーベキュー。食材そのもの味と手の加わり方にだれもが、隠岐を感じ、口々に褒め称えた。すべてがうまうまいて安堵しつつ、隠岐のおもてなしも、美しい海も、おいしい料理も、すべては制約と引き換えなのだ、と思つた。

## 木幡智恵美

45

老い老いに

「区切りという気がしないと云つたそばからレイアウトを変えてみました。少しでも読みやすくなつていけばいいのですが。そしてさらに、書きやすくなつていきますように」とは四百号の編集後記。次の号の編集後記には、「四百号で変えたレイアウトがおそろしく不評でした。よくなつたという評価は皆無で、前の方がいいというのが100%。というわけ、今回も変えてみました」。さらにはその次の号には、「その後、よくなつたじゃないのという意見もいただきました。したがって編集人はおどおどと迷いつつ今号をお届けします。まあそれも楽しみの一つなのですが」と、レイアウトについて書かれている。パソコンでは文字を打つこと、インターネット検索、メールのやり取りしかできない私にとつて、編集長がやっている操作のことは全く分からない。しかし、寄せられた原稿をうまく紙面に収まるように段組みを変えたり、カットを入れたり、タイトルを工夫したり、大変な作業であることは察せられる。紙のサイズは創刊号のB4版一枚から始まり、途中からB5版（B4版を半分に折つて四ページにしたもの）になり、さらにA5版（A4版を半分に折つて四ページにしたもの）へと変わってきた。「夕焼け通信」の題字や寄せられる原稿のタイトルも、大きさや字体などを様々に変化させ、段組みも、二段、三段、四段と試されてきている。詩のスペースの取り方などは他と段組みを変えた枠で縁取っているから、相当な技術がないとうまく収まらないのではないかと思う。誰がどれだけの長さの文章を寄越してくるか分からない中、限られた紙面内に収めるのは並大抵なことではない。しかも毎週だ。そんな作業をしながらレイアウトまで変えてみようだなんて。少しでも読みやすく、さらに書きやすくなればとの編集長の思いには頭が下がる。

それにテープ起こしなども自らが手掛けるのだから夕焼け通信編集だけでも大変な作業だ。ところが、編集長は夕焼け通信のみならず、行く先々で様々な行動を起こしている。今は松江算数活塾での活動が広がりを見せている。端が大変だろうなと思うことを、本人は平気な顔をして楽しんでさえる。一体どこからそのエネルギーが湧いているのだろうか。老い老いの身にはただただ羨ましく、眩しく見えるのだ。



30代フリーター 先週、ジイさんが話していた鈴木健の「分人民民主主義」は、1票を分割して投じるなど面倒な仕組みで、有権者にはきつと不人気だろうな。

年金生活者 そうした面倒くささを一掃する案が成田悠輔の「無意識データ民主主義」（『22世紀の民主主義』）だ。「インターネットや監視カメラが捉える会議や街中・家の中の言葉、表情やリアクション、心拍数や安眠度合い……選挙に限らない無数のデータ源から人々の自然で本音な意見や価値観」といった無数の「民意データ」をまず集める。それをもとに、人びとが無意識のうちにどんなことを求めているかを政策領域ごとにはじき出す（「エビデンスに基づく目的発見」）。そして、それらを達成するのに最適な政策を選ぶ（「エビデンスに基づく政策立案」）。これらの一連の作業はアルゴリズム（コンピュータによる問題解決のための計算手続き）によって行われる。成田はこの構想に

ついて次のように書いている。

《民主主義は人間が手動で投票所に赴いて意識的に実行するものではなく、自動で無意識的に実行されるものになっていく。人間はふだんはラテでも飲みながらゲームしていればよく、アルゴリズムの価値判断や推薦・選択がマズいときに介入して拒否することが人間の主な役割になる。》（『22世紀の民主主義』）

ふだんは天下国家のことなど考えず、自分や家族、近しい人たちの生活のことを第一に考えて暮らす存在として吉本隆明が想定した「大衆の原像」のあり方に、これまでで一番マッチする民主主義の構想が語られている。

30代 そんな民主主義が可能なのか。  
年金 アルゴリズムはコンピュータを使って問題を解くときの計算方法だ。これを社会の設計に当てはめたのが、成田の描く「無意識データ民主主義」だ。「計算」によって社会を設計する考えはコンピュータが出現する以前からあった。その最大の思想が社

会主義だ。

ソ連はそれを試みて失敗し、おびたしい人命を奪う惨事を引き起こした。計画経済は「計算」による「最適な社会」のつくり方のひとつだ。「計算」は机上でできるが、社会の構築には材料がいる。材料とは富であり、ロシアにはそれが決定的に不足していた。

しかし、ソ連共産党は、ブルジョア階級が独占する富をプロレタリアートに行き渡らせる仕組みをつくれれば、計算通りの「最適な社会」の構築に必要な富を調達できると考えた。だが、資本主義の未成熟な、言い換えれば工業化の遅れたロシアにそれだけの富はなかった。

そこで当時の基幹産業だった農業の生産物を強制的に工業生産のための資金源にした。農民からの大規模な収奪は飢饉につながり、数百万ともいわれる餓死者を出した。

「計算」による「最適な社会」の構築は、富の稀少性がゼロにまで縮減しないと不可能であることをソ連の歴史は実証した。

30代 アルゴリズムという名の「計算」による「無意識データ民主主義」についても、それは当てはまるのではないか。

年金 ソ連の場合と違うのは、富の稀少性の縮減が当時よりはるかに進んでいることだ。だから、同じような悲劇が起きることはない。

だが、稀少性がゼロにならない限り、アルゴリズムの決定には、全員が少しずつ不満を持つか、満足する者とならない者とに分かれるかのどちらかだろう。「無意識データ民主主義」の試みは、あつちにあつちになり、こつちにあつちになり、こつちで不具合を起こし、あつちで不具合を起こし、ときには国民に不利益をもたらすのを避けられない。

だとすれば、アルゴリズムにまかせっぱなしにするわけにはいかないということになる。そうなると、また現在ののように、それぞれが自らの利益の拡大に向けて走り出す。そのための党派もできるし、旧来の選挙による決定

を求める声も強まるだろう。

30代 結局あと戻りか。  
年金 成田は「無意識データ民主主義」になつても選挙は残ると考える。ただし、選挙は数ある「民意データ」の把握方法のひとつに格下げされる。現在ほとんど唯一とっていい「民意データ」の把握方法の地位から転落する、と。

だが、アルゴリズムによる「最適な

政策」の決定に不満が生じると、格下げされた選挙の地位を元に戻すように求める声の広がりが、「無意識データ民主主義」は大きな揺り戻しに遭遇するだろう。

しかし、選挙が元の地位に復帰したとしても、選挙に対する国民の期待ままで、かつてのような高さに戻るとは考えられない。大きな流れとしては成田の構想は前に進んでいくと予測できる。富の稀少性の縮減が大きな流れとしては止まらないように。また、西欧の市民革命から始まった近代の民主主義が、一進一退を繰り返し、犠牲をともないながら、現在の段階に到達したように。

30代 いつになるか見当もつかない。  
年金 もしかしたら、先にネット上で実現するかもしれない。たとえば、バルファキスが「テクノ封建制」と名づけたGAFAAMなどのプラットフォームで、市民革命に匹敵するような激変が起き、「テクノ民主制」とも呼ぶべき体制ができることが考えられる。

ニュース日記 979  
中村 礼治

## 無意識の民主主義